

らだ」と言う。私はなるほど思った。というのは、今シベリアにウクライナ人を中心として少しでも共産党に異論を唱えたり、反感の意を表したりする者は容赦なくこのシベリアに送られ、労働刑に服している。その数は何百万人か、権力による民族の団結である。

(ロ) ロシア人と共産主義

我々はロシア人といえば共産党、共産党というとロシア人と、相関関係のように思われる。労働のためロシア人とともに働くことがある。彼は実に人なつく、やさしい面を多く持っている。ところが共産主義のこじや思想的なことを話し出すと、今までにぎやかであった座は急に黙りこくなり、ついには一人減り、二人減り、ロシア人はその場にいなくなってしまう。これは後でわかったことだが、工場や事業場に共産党員が必ずいることになっていて、主義思想を話すとそのことを党員に密告するという仕組みだということを聞いて、私もそのとき冷汗をかいた。

私のシベリア抑留記

三重県 北川 長吉

昭和二十年八月八日未明、ソ連軍が満ソ国境を越えて侵攻を開始し、そして八月十五日、大命降下による終戦となった。八月二十日、武装解除となり、四平駐屯部隊の将兵は次から次へと、どこへやら連れ去られ、私は残務整理に残留させられた。野戦貨物廠時代の少数の同僚と、北支より転進部隊及び四平陸軍病院の人たちと混成隊を編成し、十一月中旬ごろ、日本へ帰してやるとソ軍監視兵にだまされて、有蓋貨車（扉入り口のところは一段式、その前後は二段式）に詰め込まれて出発。

内地送還は半信半疑でしたが、ハルビンにて指令待ちのため二日間停車した後、西に向かっていることが確認され、内地送還の夢は打ち消された。そして、満州里を越え、ソ領へ入り、チタも過ぎ、バイカル湖を

右に左に見て、一週間くらい走り続けた末、工業都市イルクーツクに到着。下車させられて、有刺鉄線で囲まれた敷地内にバラック建ての小屋と、四隅に監視望楼と、出入り口門近くに監視兵の詰所のあるお粗末な収容所に収容されたのである。

この地にいつまでいるのやら、さっぱり見当がつかない。酷寒時には、零下六十度にもなるシベリア抑留生活が始まった。収容所内には浴場設備がないので、月に一回程度、公衆浴場へ出かけるのに、徒歩にて一時間、往復で約二時間かかるので、帰ってくると湯冷めするくらいでした。入浴といっても、日本のように湯舟はなく、ちようとサウナ風呂のように蒸気で蒸されてあかを落とし、シャワーで流すだけ。被服は入浴中に滅菌室に入れてあるので、早く湯上がりしても出してもらえないので、なれるまで困ったことがありました。

毎月のように健康診断が行われましたが、健康診断というより、体位の等級検査といった方が適切で、上半身裸にされ、ソ側の軍医が来て、一人一人の体の外

観、特に尻の肉づきを見て、一級、二級、三級に区分され、その結果、各人の作業割当が行われ、三級の者は軽作業であった。

作業、入浴に出かけるときの人員点呼に悩まされた。監視兵が数えるのだが、途中まで行つて間違えたのか、戻つてきて、初めから数え直すこと数回。零下三十度、四十度の中で、いつまでも立たされていたつらさを忘れられない。

「働かざる者は食うべからず」に徹している国であるから、男も女もすべて労働している。子供を託児所へ預け、夫婦共働きで、夕方、黒パンを脇にかかえて帰る労働者の光景となく見かけた。この黒パンの主材料はエン麦粉だそうで、皮つきのまま製粉されるので、切り口を明るいところで見ると、もみがら、わらくず等、さまざまのものがとげとげしく見え、表皮は茶褐色で、ちようどれんがのようで、内地の食パンと比較すると、パンの部には入らぬと言っても過言ではない。初めて食すると食べられたものではない。ばさばさで、酸味があり、当初は「世界で一番まずい

パン、それは黒パンなり」と評していた。ロシア人は粗衣粗食であると聞いていたが、実にむだがないように感じさせられた。

我々捕虜の間では、その配給された黒パンの分配が大変な仕事であり、分配当番になると、命の縮まる思いでした。毎日、空腹感に悩まされているので、そのパンの大小、また、おれのは端っこで、彼のは真ん中だと文句たらたら。食に苦しめられると、しょせん人間も動物。これまで墮落するものだろうかと実に情けなく思った。

作業は、石炭、建築材の貨車おろし、工場の機械移設、国営農場の手伝い等、比較的軽作業が多かった。

中でも、石炭のおろし作業は、貨車の到着時刻の予定がたらず、昼であろうと夜中であろうと、到着すると即作業出動で呼び出され、現地に行くと五十トン有蓋車に満載された貨車が数両到着している。屋外作業なので、冬期には、防寒帽に防寒服を着用する。ぶくぶくの厚着姿ではすぐ汗が出て、下着は汗びたしになるので、風邪をひかないよう、注意をして作業をしたも

のです。

いつか昼間、工場内の整理整頓作業に行ったときの休憩時に、ソ連人の年配労働者（七十歳くらい）が、我々のところへ来て、付近に監視兵のいないことを確かめてから、小声の日本語で、「兵隊さん、ご苦労さんです」と話しかけてこられたので、一同びっくりして、通訳を通じ聞いてもらったら、「私は日露戦争で捕虜となり、日本の横浜収容所へ行ったときはよい待遇を受けた」と懐かしがり、「今、あなた方がロシアへ来られても、革命でこんな社会になって、何もしてあげられないのが残念である、皆さんも体を大切にしてください」と言われ、こんな純情なソ連人もいるのかなと思ひ、心温まる思いがした。

一年くらい経過してから、イルクーツクの収容所ともお別れして、電灯もない奥地の収容所へ移り、六か月くらい山小屋のようなところで石油ランプ生活を送り、二十二年五月、待望の内地へ帰ることができたときは、同僚とともにシベリアで死ななくてよかったと

喜び合つて、舞鶴にて別れを惜しみつつ、それぞれ郷里へと戻つた。亡き戦友のご冥福をお祈りします。

抑留三年ナホトカで返される

岩手県 菅原 義三

昭和二十年の十一月の十日前後だったと思います
が、牡丹江より二段の貨車に乗せられました。そのころは、もう日本人は牡丹江、ウラジオストック、東京へ帰すんだといふことの話でいっぱいでした。ソ連の兵隊も全部日本人は牡丹江、ウラジオストック、東京へ帰すと、こういうふうに言つておつたわけです。私たちはもちろんいい方へとりますから、そのことを全面的に信じて貨車に乗りました。貨車には大きなストーブが一個あつたわけです。ウラジオストックまで二日か三日しかからない、そんな距離でございます。どうしてこのようなストーブがあつたのかと、そのとき気がつかなかつたわけです。今にして思えばあのス

トープはシベリアへ行くための暖房のストーブだったわけでございます。

やがて汽車に乗りまして、牡丹江からウラジオストックへ行くには東へ東へと汽車が進むわけです。なるほど二日ぐらいは東へ進みました。三日ごろから進行方向の右手からおてんとさんが上つてきました。これはおかしい、方向が違ふ。どうもおかしい、怪しいなあと思つておつたんですが、いやまだまだ広しい、汽車も蛇行する關係上、そういうこともあるだろうと、そういうことだつたわけですが、四日、五日たつても進行方向の右手よりお日さまが上るわけです。北の方に走っているわけです。いやハバロフスクに着いたらそれから引き返すんだといふようなことでおつたわけなんです、ハバロフスクと思われる大きな町を過ぎますと、今度は汽車は西へ西へと向かつて行くわけです。お日さまが進行方向に沈むといふことで、完全に汽車は西へ西へと向かつておるわけです。もうそのころは、半分ぐらいあきらめの心境で、いやこれはだめだと、我々は捕虜としてシベリアへ行つて働かされる